

加藤勤纂輯『通常物問答』(明治八年)の語彙とその性格

— 付 語彙索引 —

The analysis of vocabulary of TSUJIBUTU-MONDOU by KATO Isoshi (1875).
Appendix a word list of it.

大橋 敦 夫

Ohashi Atsuo

要旨

明治初期に出版された図解語彙集に先立つ問答体の語彙集『通常物問答』(明治八年)の語彙索引を作成した。後続の『通常物図解便覧』(明治九年)『通常物図解問答』(明治一〇年)の語彙との比較を行い、明治期教育基本語彙の一斑を明らかにした。

キーワード：日本語語彙・明治期語彙・加藤勤・『通常物問答』

一 はじめに

前稿⁽¹⁾で扱った『通常物図解便覧』(明治九年)、『通常物図解問答』(明

治一〇年)に先行する『通常物問答』(明治八年)を入手した。語の解説は、文章のみで図解を欠くが、本文に先立つ「例言」で語彙選択の方法に触れており、明治初期図解語彙集の語彙を考察するにあたり、出発点となる資料である。前稿と同様の手法で、索引を作成するとともに、その語彙の性格について考察する。

二 資料の紹介

まず、書誌的事項を示す(図版参照)。

通常物問答

信濃上田

加藤勤纂輯

第一章

各個「メイ、イ、ノ前ニ在テ書ヲ讀ミ字ヲ寫ス托子「ダ、イ、ト為シ
 其形机「ソク、モ、ニ似テ大ニ脚「アシ、ノ高キ者ヲ何ト謂ヤ○テ
 イフル「ル、テイフルニ向ヒ腰ヲ掛ル者ヲ何ト謂ヤ
 ○ベンチ「カク、シ、カク、ナリ、長方形ノ木匠「ワ、ク、へ磨「ル、タル薄キ石ヲ嵌「マ、シ
 寫字ノ用ニ供スル者ヲ何ト謂ヤ○石盤「セキ、パン、其製粉「コ、シ、フ、カ、ク、シ、
 錠子「ズ、ミ、ニ類シ石盤へ字ヲ書スル者ヲ何ト謂ヤ○
 石筆「セキ、ヒツ、石盤上ノ字ヲ拭ヒ去リ及ヒ浴湯「ユ、ツ、カ、フ、ノ代石鹼「シヤ、ボン、

▲「通常物問答」(明治8年)本文1丁・表

ヲ擦付テ身ノ垢ヲ吮ヒ取り或ハ金瘡療治ニ血
 ヲ拭フ者ヲ何ト謂ヤ○海綿坐シテ書ヲ讀ミ字
 ヲ寫スニ用ヅル四脚ノ長キ卓ヲ何ト謂ヤ○唐
 机兩脚ニシテ其形軟斜シ書ヲヨセカケテ讀ム
 器ヲ何ト謂ヤ○倚書床硯ノイヘヲ何ト謂ヤ○
 研匣青銅又ハ磁製ノ背上ニ齒アリテ案頭ニ置
 キ筆ヲ架ル器ヲ何ト謂ヤ○筆床硯海ノ潤ル
 片注足シガ為メ豫メ机上ニ水ヲ貯ル器ヲ何ト
 謂ヤ○書滴書ヲ披キ字ヲ寫ス片鎮壓ニスル器
 ヲ何ト謂ヤ○鎮尺洋紙ヲ以テ製シタル懐中ノ

通常物問答例言

一 通常物問答、固宜指實物而發焉、但教場中、物品有限、則勢不得、不索問題於外、是所以有此書之纂輯也

一 書中物品、一據文部省編纂小學讀本、而纂次之、然其與單語圖、相重複、及童蒙之平素不慣見、難稱以通常物者、共省之

一 テーブル、カフモリ之類、兒童在家日夕目擊、即是通常物、雖則讀本之所不收、不得採而錄也
一 物品、次序異於所據之書者、何也、蓋以類相從、不

能^レ無^キ少^シ變^ハ置^キ、是^レ自^ラ然^ル之^ノ勢^ハ、非^レ有^シ意^ヲ於^テ變^ス之^ヲ也、若^キ夫
刀^ノ劍^ノ大^ニ砲^ノ、首^ノ尾^ノ易^シ地^ヲ、繼^グ之^ニ以^テ書^ク櫃^ヲ、不^レ免^ル有^シ微^シ意^ヲ在^ル
者^ハ、則^チ甘^ク而^{シテ}受^ル僭^ス踰^ス之^ノ罪^ヲ耳

明治七年十二月

加藤勤誌

「通常物問答」(明治八年四月)

加藤勤(信濃上田)纂輯

如不及齋蔵梓

書肆…(東京書林) 須原屋茂兵衛・山城屋佐兵衛・椀屋喜

兵衛・和泉屋吉兵衛・和泉屋市兵衛・和泉屋孝之

助

見出しに内表紙。例言一丁+本文九丁。裏見返しに書肆名を示す。

和装タテ二・三×ヨコ一五・二cm。濃紺表紙。

なお、上記の架蔵本の読みにくい箇所等を参照するために、上田

女子短期大学蔵本(図書記号三七五/Ts四九)をも用いた。架蔵

本との違いは、①黄色表紙、②題簽(「通常物問答 加藤勤纂輯」)
あり、③裏見返しに書肆名は「芝三島町 山中市兵衛」のみ、の三
点で、例言・本文に相違はない。

本文は、文章(問答)のみで図解はない。問の文章は、パターン
化(○○者ヲ何ト謂ヤ)されていて、答は、あつさりと語だけが
示される。語数は、半丁に七語前後が挙げられている。

表記は、漢字カタカナ交じりである。答の語(項目語)には、ル
ビが付されているが、問の文の漢字・漢語へのルビ振りは、すべて
ではなく一定していない。

三 「通常物問答」(明治八年)の語彙の特徴

本文に先立つ「例言」(一丁)で、項目語の選定対象について述べられている(図版参照)。

すなわち、文部省編纂『小学読本』を主としていること、子どもたちが平素目している物であること、意味のまとまりで語を掲げていることが確認できる。

項目語選定の方針が述べられているのは、この種の資料としては、貴重である。ただし、明治八年時点で、文部省編纂と目される『小学読本』は、二種または三種ある^②。同定については、後考を俟ちたい。語彙分析の前提として、本文の構成(全六章)を示しておく。

■ 『通常物問答』(明治八年)の本文構成

章	丁	語数	語の意味分野
第一章	1・オ↘2・ウ	二〇語	学用品が主
第二章	2・ウ↘4・オ	二一語	身につける道具・紙製品
第三章	4・オ↘5・ウ	二〇語	金へんの道具・糸と火
第四章	5・ウ↘7・オ	二四語	はかり・うす/木製道具
第五章	7・オ↘8・オ	二二語	大工道具・船
第六章	8・オ↘9・ウ	二三語	車・楽器・測量

三十一 意味分野から見た語彙の特徴
全二三〇語を、前稿と同じ意味分野に分類してみる。

- 器財……………八五 船具……………八
- 工具……………一一 農具……………二
- 文具……………一九 衣服……………二
- 武器……………三

器財が圧倒的に多いのは、『通常物図解便覧』(明治九年)・『通常物図解問答』(明治一〇年)と同様である。これに次ぐのは、文具・工具で、これも同傾向である。特徴的なのは、船具が多いことである。

三十二 『通常物図解便覧』(明治九年)・『通常物図解問答』(明治一〇年)との語彙の一致について

続いて、後続資料二種との語彙の一致について考察する。

- A 『通常物図解便覧』(明治九年)との一致語……………四五語
- B 『通常物図解問答』(明治一〇年)との一致語……………四三語
- C 『通常物問答』(明治八年)とすると、

- A ∩ B ∩ ……三六語
- A ∩ C ……九語
- B ∩ C ……七語

となった。三種の資料に共通して現れた三六語は、当時の教育基本語彙と言い得るものである。

□ 三種の資料に共通して現れた三六語

- アフギ クギ セキヒツ ハリ
- イトグルマ クギヌキ チキウギ ヒキウス
- ウス クシ チリトリ フネ

カギ コガタナ テシヨク フロシキ

カケモノ コテ テヲノ ベントウ

カタチ スキ ナハ ミツイレ

カマ ススリバコ ノコキリ メガネ

カラウス スリバチ ノミ ヤスリ

カンナ セキバン バシヤ ランプ

□A〇C

ザウリ ツケギ ヒバシ

サヲ ツルギ ホ

スミトリ ハシ ムシロ

□B〇C

オホゾツ ケンビキヤウ デウ ビン

カナヅチ テイフル トウメガネ

三三三 項目語・問の文の用語やルビに見られる特徴

次に、『通常物問答』(明治八年)の項目語(答の語)や問の文中の用語や、ルビに見られる特徴について見てみる。

〔項目語〕

①開化語

石盤(セキバン) 石筆(セキヒツ) 瀛車(ジヤウキシヤ)

②外来語

テイフル ベンチ ブック ポットロード^③ ランプ

③死語

燭刀(シンキリ) 廢紙(ホウグ)

〔問の文のルビの特徴〕

①濁点が一定していない

具(ダウグ¹タウク)

②一点の濁点があるように見える(傍線部)

海(ミツ) 1・ウ……四つ仮名を反映か

洋紙(ハクライカミ) 1・ウ

陸地(クカヂ) 6・オ

端(コクチ) 4・オ

③別語を示している場合がある

示ス(ミセル) 9・ウ

點スル(ツケル) 3・オ

瞭然(アキラカ) 3・オ

挾持スル(ハサム) 2・オ

潤水(タニガワ) 7・オ

④注釈的なルビが見られる
 硝子(ビイトロ) 9・ウ……外来語による言い換え
 再ビ(ニド) 3・ウ……漢語による言い換え

參校スル(ガクカウヘデル) 2・オ

相摩シテ(スリアハセ) 5・オ

咄嗟(イキスルマ) 5・オ

装火(ヒヨツグ) 5・オ

将雨将晴(フルカハルルカ) 9・ウ

必須(ゼヒイリヨウ) 7・ウ

携行(モチアルク) 3・ウ

燈炷(ラウソクノシン) 3・ウ

同作用(ヲナシハタラクヲナス) 9・ウ

節用集における左訓注のようなルビである。さらに、次例のように、本文を飛ばして読むルビも散見する。

架スル物(カケル) 5・オ

彈スル者(ヒク) 9・オ

⑤現代と違う音がある

洋布(セイイヨウヌノ) 2・ウ

所用(シヨイヨウ) 7・ウ

四 おわりに——今後の課題——

語彙集としての整合性を考えると、コトバだけで説明することの限界が露呈している部分もある。(たとえば、「軸(チク)」の説明に、轂(コシキ)が出てくるが、轂は、項目語としてその後に出てくる。)この辺りに、図解を必要とする点が認められる。

ともあれ、通常物を図解する前の段階の資料を分析することができた。これによって、今後さらに同種の資料の発掘・調査の必要度が高まったと言える。

編纂における影響関係を考える上では、文部省編纂『小学読本』に加え、「例言」から『単語図』も視野に入れていく必要がある。³⁾

なお、『通常物問答』(明治八年)の資料批判を深めるために、派生する課題としては、次のものが挙げられる。

①編纂者・加藤勤⁵⁾の他の著作との関係から見る本書の位置

②幕末期の上田藩の教育事情

【注】

1 拙稿『通常物図解便覧』(明治九年)の語彙とその性格―付 語彙索引

―『学海』一八(上田女子短期大学国語国文学会二〇〇二・三)ならびに同『通常物図解問答』(明治一〇年)の語彙とその性格―付 語彙索引―『上田女子短期大学紀要』二六(二〇〇三・一)

2 ①田中義廉編『小學讀本』(明治六年)

②榊原芳野編『小學讀本』(明治六年)

③榊原芳野・那珂通高・稲垣千穎編『小學讀本』(明治七年)いずれも、巻一は、図を掲出して、図解の要素が濃い。

3 明治生まれの話を対象とした調査から、「ポットロ」の語形で、信州各地で一時期用いられたと考えられている(馬瀬良雄氏著『信州のことば―21世紀への文化遺産』信濃毎日新聞社 二〇〇三・六 三四八頁)。

編者・加藤勤が信州上田出身であることと関係があるか?

4 さらに榊木正太郎注解/師範学校編纂『単語問答』(上・中・下)のような類書も、押えていきたい。

5 一八二二(文化九)〜一八七八(明治一一)年。漢学者・教育者。上田藩の藩学明倫堂の惣司加藤維藩の長男に生まれる。長じて惣司となる。同藩の教育者で、教科書の著作もある上野尚志と親しい。

◆『通常物問答』(明治八年) 語彙索引◆

【凡例】

・項目語(答の語)のルビによって、五〇音順に配列した。

・異体字は可能な限り活字化した。実現できなかった字については傍線を施した。

・一部の項目語・問の文には、ルビのないものがある。

■ア行

アシダ 足駄

木履ノ齒高ク泥行ノ用ヲ為ス者ヲ何ト謂ヤ
(3・オ)

アハセト砥

其質細ナル者ヲ何ト謂ヤ(5・ウ)

アフギ 扇

夏日揮テ暑ヲ驅リ涼ヲ取ル者ヲ何ト謂ヤ(2・ウ)

アラト 礪

磨石ノ質粗キ者ヲ何ト謂ヤ(5・ウ)

イタ 板

大鋸ヲ以テ挽解タル薄キ木ヲ何ト謂ヤ(7・オ)

イチノオ初毫

ニノオ中毫

サンノオ末毫

衝頭ニ處ニ提ル索子ヲ繫ク各索ノ名ヲ何ト謂ヤ(5・ウ)

イトグルマ絲車

綿ヲ繰リテ糸ト為ス具ヲ何ト謂ヤ(4・オ)

ウス 臼

木石ヲ穿チ凹メテ穀類ヲ精グル器ヲ何ト謂ヤ(6・ウ)

ウワウス磨上轉石

碾礪ノ内上ニ在テ運轉スル者ヲ何ト謂ヤ(6・ウ)

ウヲアミ網

麻糸ヲ結ンテ罾トナシ魚ヲ捕フル物ヲ何ト謂ヤ(6・オ)

エリマキ襟巻

多クハ毛布ヲ用キテ頸ヲ祭ヒ寒氣ヲ禦ク者ヲ何ト謂ヤ(2・ウ)

オホツ、大砲

堅城固郭モ能ク一打ニ打碎ク歐洲發明ノ大利器ヲ何ト謂ヤ(9・オ)

オホワ 輓

■カ行

カイコカゴ蠶箔

割リタル竹ヲ織リテ簿ト為シ蠶ヲ養フ具ヲ何ト謂ヤ(4・ウ)

カイシ 界紙

紙一葉ヲ何行ニテモ適宜ニ解合ヒ絲欄ヲ印シタル紙ヲ何ト謂ヤ(3・ウ)

カイメン海綿

石盤上ノ字ヲ拭ヒ去リ及ヒ浴湯ノトキ石鹼ヲ擦付テ身ノ垢ヲ吮ヒ取り或ハ金瘡治療ニ血ヲ拭フ者ヲ何ト謂ヤ(1・ウ)

カギ 鑰

鑊ヲ開ク器ヲ何ト謂ヤ(4・オ)

カケモノ掛物

書畫ヲ襪装シテ幅ト為シ床ノ間ヘ掛ル物ヲ何ト謂ヤ(3・ウ)

カジ 楫

舟ノ旁ニ在テ水ヲ撥ヒ舟ヲ行ル具ヲ何ト謂ヤ(8・オ)

カタナ 刀

劍ハ兩刃ナリ後世常ニハ用キズ常ニ用キル片刃ノ者ヲ何ト謂ヤ(9・オ)

カナヅチ鐵槌

釘又ハ鑿柄ノ頭ヲ打物ヲ何ト謂ヤ(7・ウ)

カフモリ蝙蝠傘

金骨ニ洋布ヲ張りコレヲ開ケハ蝙蝠ノ翼ヲ展ルガ如ク雨天ニハ雨ヲ防キ炎天ニハ日ヲ遮リ又卷テ倒ニ持テハ箒ノ代ニ用ユベキ者ヲ何ト謂ヤ(2・ウ)

カマ 鎌

稲麥ヲ穫リ柴草ヲ刈リ其他所用甚廣人家必須ノ具ヲ何ト謂ヤ(7・ウ)

車輪ノ外圍ヲ何ト謂ヤ(8・ウ)

カマシキ静拂

火ヨリ卸ス熱器ノ底ニ敷ク托子ヲ何ト謂ヤ

(5・ウ)

カラウス碓

足ニテ春ク臼ヲ何ト謂ヤ(6・ウ)

カンナ 鉋

手斧ノ迹ヲ猶復タ削リ滑ニスル器ヲ何ト謂ヤ(7・オ)

キウシヤ牛車

一車兩轆牛ニ駕シテ重荷ヲ引カシムル者ヲ何ト謂ヤ(8・ウ)

キネ 杵

臼中ノ穀ヲ春ク槌ヲ何ト謂ヤ(6・ウ)

クギ 釘

尖ノ鋭コト錐ノ如ク物ヘ打込ミ彼此相固着セシムル物ヲ何ト謂ヤ(7・ウ)

クギヌキ千斤

木上ノ舊釘ヲ嚙起ス器ヲ何ト謂ヤ(7・ウ)

クシ 櫛

黄楊ノ木ニテ作り髪ヲ梳ル器ヲ何ト謂ヤ(2・ウ)

クルマ 車

陸地上人ヲ載セ物ヲ運ブ具ヲ何ト謂ヤ(8・オ)

ケイガミ格眼紙

界紙ヲ又一行何字ト意ノ如クニ解リ横畫ヲ施シテ謄書ノ界枋ト為ス物ヲ何ト謂ヤ(3・ウ)

ケサン 鎮尺

書ヲ披キ字ヲ寫ストキ鎮壓ニスル器ヲ何ト謂ヤ(1・ウ)

ケンザヲ間竿

同作用ノ篙ヲ何ト謂ヤ(9・ウ)

ケンダイ倚書床

両脚ニシテ其形欹斜シ書ヲヨセカケテ讀ム器ヲ何ト謂ヤ(1・ウ)

ケンビキヤウ顯微鏡

小物ヲ大キク見スル鏡子ヲ何ト謂ヤ(3・オ)

コガタナ刀子

紙ヲ剪リ木ヲ削ルニ用キル其形刀ニ似テ小サキ刃物ヲ何ト謂ヤ(2・ウ)

コシキ 轂

内ハ軸ヲ受ケ外ハ輻ヲ轆ル者ヲ何ト謂ヤ(8・ウ)

ゴトク 鐵架

薄板ノ如キ光鐵ヘ木ノ柄ヲ嵌シ壁ヲ塗ル器ヲ何ト謂ヤ(7・ウ)

■サ行

サイハラヒ拂塵

三脚アル鐵ヲ爐火ノ中ニ立鐵瓶盜鍋等ヲ架スル物ヲ何ト謂ヤ(5・オ)

ザイモク材木

細竹ノ尖ヘ狭ク疊ミタル紙ヲ約シテ塵穢ヲ掃フ物ヲ何ト謂ヤ(4・ウ)

ザウリ 艸履

梁柱桁椽其他家屋構造ニ需用ノ諸木料ヲ総ヘ名ツケテ何ト謂ヤ(7・オ)

サヲ 竿

舟ヲ刺ス竹ヲ何ト謂ヤ(8・オ)

サン 緝

錢ヲ貫ク索子ヲ何ト謂ヤ(4・ウ)

シツ 瑟

下ニ在テ動カザル者ヲ何ト謂ヤ(6・ウ)

ジヨウキシヤ瀛車

其形琴ニ似テ大キク二十三絃ヲ繫テ彈スル者ヲ何ト謂ヤ(9・オ)

シヨウモン券 約證ニ用キル憑由ヲ何ト謂ヤ(3・ウ)

シンキリ燭刀 燈炷ヲ夾ム物ヲ何ト謂ヤ(3・ウ)

ジンリキシヤ人力車 乗者ヲシテ箕踞セシメ人ノ輓テ捷ク走ル小キ車ヲ何ト謂ヤ(8・ウ)

スキ 鋤 田ヲ耕シ畦ヲ鉏キ鉄ト並用キル具ヲ何ト謂ヤ(8・オ)

スキガヘシ還魂紙 ソレヲ再ビ治メタル紙ヲ何ト謂ヤ(3・ウ)

ス、リバコ研匣 硯ノイヘヲ何ト謂ヤ(1・ウ)

スミトリ炭斗 籃若シクハ筥ヘ炭ヲ盛リテ火爐ノ旁ニ置キ咄嗟ニ裝火ノ用ヲ辨スル物ヲ何ト謂ヤ(5・オ)

スリバチ播盆 物ヲ糝細ス鉢ヲ何ト謂ヤ(6・ウ)

セイウケイ晴雨計 硝子管ヘ水銀ヲ充テ其昂低ヲ見將雨將晴ヲ知スル器ヲ何ト謂ヤ(9・ウ)

セウ 笙 笛ノ一種管ヲ瓢中ニ列ネテ吹ク物ヲ何ト謂ヤ(9・オ)

セウホウギ小方儀 遠近ヲ量ル器械ヲ何ト謂ヤ(9・ウ)

セキバン石盤 長方形ノ木匣ヘ磨タル薄キ石ヲ嵌シ寫字ノ用ニ供スル者ヲ何ト謂ヤ(1・オ)

セキヒツ石筆 其製粉錠子ニ類シ石盤ヘ字ヲ書スル者ヲ何ト謂ヤ(1・オ)

■タ行

タイホウキ大方儀 高卑ヲ量ル器械ヲ何ト謂ヤ(9・ウ)

タウツクエ唐机

タウミ 唐箕

タ、ラ 鞆

チイサキミヅカラ ウス 小水碓

ヂウノ 遞火

チキウギ地球儀

ヂク 軸

チリトリ塵斗

ツケギ 附木

ツルギ 劍

テイフル

坐シテ書ヲ讀ミ字ヲ寫スニ用キル四脚ノ長キ卓ヲ何ト謂ヤ(1・ウ)

車ヲ轉シ風ヲ發シ米糠殻ノ三ヲ煽ギ分ル器ヲ何ト謂ヤ(6・オ)

鍛工ノ火ヲ吹キ熾ス革囊ヲ何ト謂ヤ(6・オ)

田舎ニテ木ヲ刻リ勺トナシテ澗水等ノ流ヲ承ケ水ノ勺ニ滴ルトキ杵首仰起シ勺水ヲ傾盪ス其勢ニ杵復タ下テ白ニ就キミヅカラ春テ人力ヲ用キザル者ヲ何ト謂ヤ(7・オ)

銅或ハ鐵ヲ以テ小サク箕ノ形ニ作り火ヲ盛撥ブ物ヲ何ト謂ヤ(5・オ)

海陸ノ部分世界ノ形體ヲ收小ニシテ示ス具ヲ何ト謂ヤ(9・ウ)

車ノ心棒轂ヲ貫キ輪ヲ持ツ者ヲ何ト謂ヤ(8・ウ)

帚聚タル塵穢ヲ収メ去ル物ヲ何ト謂ヤ(4・ウ)

薄木片ノ端ヘ硫黄ヲ塗り火ヲ引キ燃ス物ヲ何ト謂ヤ(5・オ)

治ニ亂ヲ忘レ絲竹等ニ耽レハ亂ル亂アルトキ賊ヲ刺シ敵ヲ切ル者ヲ何ト謂ヤ(9・オ)

各個ノ前ニ在テ書ヲ讀ミ字ヲ寫ス托子ト為シ其形机ニ以テ大二脚ノ高キ者ヲ何ト謂ヤ(1・オ)

デウ 鑄

鐵ノ殼アリ鑄アリテ門戸倉廩其他貨櫃衣厨等
ヲ鎖ス器ヲ何ト謂ヤ (4・オ)

ハシ 箸

木又ハ竹ニテ製シ食物ヲ挾持スル者ヲ何ト謂
ヤ (2・オ)

テシヨク手照

燭檠ノ短小ニシテ携行ベキ物ヲ何ト謂ヤ (3・ウ)

バシヤ 馬車

一馬或二馬ニ駕スル洋製ノ飛輓車ヲ何ト謂ヤ
(8・ウ)

テヲノ 手斧

木上ノ斧痕ヲ平ラゲ滅ス器ヲ何ト謂ヤ (7・オ)

ハナガミブクロ夾囊

掀鼻紙其他金圓藥物等ヲ包テ懷中スル者ヲ何
ト謂ヤ (2・ウ)

トモ 舳

遠方ヲ近ク見スル鏡子ヲ何ト謂ヤ (3・オ)

ハ、キ 帚

棕皮ノ毛又ハ蜀黍ノ穂ハ竹ノ柄ヲ付ケ席上ノ
塵埃ヲ掃ヒ及ヒ竹枝苕草ヲ束ネテ地上ノ糞穢
ヲ除ク者ヲ都テ名付ケテ何ト謂ヤ (4・ウ)

ナ行

車前ノ長木端ニ横木ヲ勾シ牛馬ニ駕スル者ヲ
何ト謂ヤ (8・ウ)

ハリ 針

頭ノ孔ヘ線ヲ貫キ衣裳ヲ縫フニ用ヰル物ヲ何
ト謂ヤ (4・オ)

ナガエ 轆

搗柔ニセル稲秸ヲ二股又ハ三股ニ紉成シテ
束紮ノ用ニ供スル物ヲ何ト謂ヤ (4・ウ)

ハリガネ鋼線

銅鐵其他黃銅白銀等ノ諸金屬ヲ引延シテ線ノ
如クシ其用甚廣キ者ヲ何ト謂ヤ (6・オ)

ニナイ 擔桶

花柏棺板ヲ編ミ合セテ底アル圈ト成シ箍箍ヲ
嵌テコレヲ固メテ水ヲ盛り運ブ具ヲ何ト謂ヤ
(6・ウ)

ヒウチダウグ鎖具

鎌石相摩シテ火ヲ出ス物ヲ何ト謂ヤ (5・オ)

ノコキリ鋸

刀ニ以テ齒アリ毎齒刃アリテ竹木ヲ轆リ切ル
器ヲ何ト謂ヤ (7・ウ)

ヒガサ 涼傘

竹ノ骨ヘ青キ紙ヲ張り夏日ニ日光ヲ障ル者ヲ
何ト謂ヤ (3・オ)

ノミ 鑿

首ニ刃アリテ木ヲ穿ツ器ヲ何ト謂ヤ (7・ウ)

ヒキウス碾磑

石ニ磨眼ヲ鑿テ米ヤ麥ノ粉ヲ挽ク器ヲ何ト謂
ヤ (6・ウ)

ハ行

輕重ヲ稱ルニ用ヰル竿ノ前後背ニ星兩ヲ盛り
クル者ヲ何ト謂ヤ (5・ウ)

ヒツカ 筆架

青銅又ハ磁製ノ背上ニ齒アリテ案頭ニ置キ筆
ヲ架ル器ヲ何ト謂ヤ (1・ウ)

ハカリザヲ衡

輕重ヲ稱ルニ用ヰル竿ノ前後背ニ星兩ヲ盛り
クル者ヲ何ト謂ヤ (5・ウ)

ヒバシ 火箸

黃銅又ハ鐵製ノ細筭ニテ熾火ヲ挾拳ル物ヲ何
ト謂ヤ (5・オ)

ビン 壺

水薬香水又ハ酒油等ヲ盛ル磁罈ニ似タル硝子器ヲ何ト謂ヤ(5・ウ)

フクロ 囊

木綿若クハ帛ノ三邊ヲ縫ヒ一方ヲ開テ口トナシ物ヲ盛ルノ具即チ現今石盤ヲ入レテ持来レル者ヲ何ト謂ヤ(2・オ)

フシシガミ 箋紙

疑ハシキ文字ヘ貼ル紅紙ヲ何ト謂ヤ(2・オ)

ブック

洋紙ヲ以テ製シタル懐中手冊ヲ何ト謂ヤ(2・オ)

フネ 舟

江海上人ヲ濟シ物ヲ漕ブ具ヲ何ト謂ヤ(8・オ)

フロシキ 風呂敷

木綿稀ニハ帛ヲ以テ之ヲ製シ書籍ヲ包ミ来レル者ヲ何ト謂ヤ(2・オ)

フンドウ 分銅

衡上ヲ往来シテ轻重ヲ均適スル錘ヲ何ト謂ヤ(5・ウ)

ヘサキ 爐

舟首ヲ何ト謂ヤ(8・オ)

ベンチ

テイフルニ向ヒ腰ヲ掛ル者ヲ何ト謂ヤ(1・オ)

ベントウ 行厨

各々毎日参校スルニ携来レル午饭飯ヲ何ト謂ヤ(2・オ)

ホ 帆

檣上ニ掛テ風ヲ受ケ船ヲ進ムル幔ヲ何ト謂ヤ(8・オ)

ホウグ 廢紙

墨痕アリテ其儘ニテハ復用ユベカラザル紙ヲ何ト謂ヤ(3・ウ)

ホクチ 發火

鎌石ノ摩出スル火ヲ受取ル物ヲ何ト謂ヤ(5・オ)

ポット 鉛筆

ブックヘ書スル筆ヲ何ト謂ヤ(2・オ)

ホバシラ 櫛

ホンバコ 書櫃

■マ行

マキ 卷物

マサカリ 鉞

ミ 箕

ミヅイレ 書滴

ミツナ 水繩

ムシロ 席

メカネ 眼鏡

■ヤ行

ヤ 輻

船上ニ長木ヲ立テ帆ヲ張ル者ヲ何ト謂ヤ(8・オ)
人々讀テ古今ノ變ニ通シ頑陋ノ見ヲ破ル者ハ書籍ナリ其レヲ貯ル器ヲ何ト謂ヤ(9・ウ)

縦短ク横長キ書畫等ヲ卷舒スベキヤウニ裝飾シ軸端ニハ水晶象牙紫檀ノ類ヲ嵌シ標首ニハ彩繪文絹金緞ノ属ヲ用ヒ打壓竹ヘ細キ緑區條ヲ穿チ其末ニ骨杈ヲ着テ栓束シ置ク物ヲ何ト謂ヤ(4・オ)

木ヲ糲リ薪ヲ析クニ用キル具ノ斧ヨリ大ナル者ヲ何ト謂ヤ(7・オ)

楮皮ヲ割テ經トシ小篠ヲ緯トシ踵狹舌廣織リ造シテ穀ノ塵ヲ簸去物ヲ何ト謂ヤ(6・オ)

硯海ノ涸ル、トキ注足ンガ為メ豫メ机上ニ水ヲ貯ル器ヲ何ト謂ヤ(1・ウ)

町段畝歩ヲ查丈スルニ用キル索ヲ何ト謂ヤ(9・ウ)

藺又ハ蒲又ハ薄ク剥ギタル藤蔓ヲ以テ織リタル地衣ノ総名ヲ何ト謂ヤ(4・ウ)

水晶又ハ硝子製ノ目ヲ捺ヒ物ヲ瞭然ト見ル器ヲ何ト謂ヤ(3・オ)

輪ト轂ト相接スル衆木ヲ何ト謂ヤ(8・ウ)

ヤスリ 鋸

鋸刃ヲ利スル器ヲ何ト謂ヤ(7・ウ)

ヨツデ 罾

四隅ヘ竹ヲ張り水底ニ沈メテ魚ヲ捕フル物ヲ何ト謂ヤ(6・オ)

■ラ行

ランプ

石腦油又ハ松根油ヲ用キテ火ヲ點スル硝子器ヲ何ト謂ヤ(3・オ)

ルツボ 罎

鞴ニテ火ヲ吹クトキ烈焰ノ中ニ置テ金屬ヲ盛り鎔ス壺ノ如キ器ヲ何ト謂ヤ(6・オ)

レンギ 連木

轆碎ク棒ヲ何ト謂ヤ(6・ウ)

堅木ニテ末ヲ扁ク造リ舳ニ着ケ左右ニ動かシテ舟ヲ進ムル具ヲ何ト謂ヤ(8・オ)

■ワ行

ワ 輪

車ノ運轉スル所以ノ者ヲ何ト謂ヤ(8・ウ)